

2014年度自己点検・評価報告書(シート)

【目標の進捗状況(達成度)評価・報告】(最終年度)

《大学》

担当(記述)部局は、 ☆印の箇所を記入してください。

I. 評価項目・要素と担当部局

本報告書(シート)の自己点検・評価項目・要素と担当部局は次のとおりである。

対象部局	神学研究科
大項目	6 教育内容・方法・成果 (研究科)
中項目	6.3 教育方法
小項目	6.3.1 教育方法および学習指導は適切か。
要素	教育目標の達成に向けた授業形態(講義・演習・実験等)の採用 履修科目登録の上限設定、学習指導の充実 学生の主体的参加を促す授業方法 研究指導計画に基づく研究指導・学位論文作成指導(院) 実務的能力の向上を目指した教育方法と学習指導(専院)
小項目	6.3.2 シラバスに基づいて授業が展開されているか。
要素	シラバスの作成と内容の充実 授業内容・方法とシラバスとの整合性
小項目	6.3.3 成績評価と単位認定は適切に行われているか。
要素	厳格な成績評価(評価方法・評価基準の明示) 単位制度の趣旨に基づく単位認定の適切性 既修得単位認定の適切性
小項目	6.3.4 教育成果について定期的な検証を行い、その結果を教育課程や教育内容・方法の改善に結びつけているか。
要素	授業の内容および方法の改善を図るための組織的研修・研究の実施

II. 目標の進捗状況(達成度)評価と報告【2014.4.30現在】

《進捗状況(達成度)評価》

本項目において、2009年度～2013年度の中期的な「目標」と「指標」を次のとおり設定し、毎年度進捗状況(達成度)の自己評価を行っている。進捗状況(達成度)評価は、目標の2014年4月30日現在における進捗状況(達成度)の評価(2013年度1年間の活動評価ではなく、2014年4月30日現在で目標がどこまで進んだかの評価)であり、A、B、C、Dの4段階で行ったものである。A、B、C、D評価の基準は目安として次のようなものである。

- A : 目標実現のための計画や方策などを適切に実行し、目標を達成している。もしくはほぼ達成している。
- B : 目標実現のための計画や方策などを概ね適切に実行しているが、まだ目標は達成していない。
- C : 目標実現のための計画や方策などを実行しているが十分ではなく、目標は達成していない。達成にはまだしばらく時間がかかる。
- D : 目標実現のための計画や方策などを実行していない。当然目標は達成していない。

2009年度に設定した「目標」	左記目標の「指標」	進捗状況(達成度)評価				
		2009	2010	2011	2012	2013
1. カリキュラム・ポリシーに沿ったシラバスが作成されているか検証する制度を構築する。	→既存のカリキュラム研究委員会(研究科)による検証および研究科委員会に対する報告書の作成(2013年度までに)。	C	C	C	B	B
2. 上記目標を実現するために、ファカルティ・デベロップメント(FD)活動を充実させる。	→研究科独自の課題に対応するFD研修会の開催(年2回)。	C	C	C	B	A
3. 学生による授業評価をファカルティ・デベロップメント(FD)活動にフィードバックさせる。	→学生による授業評価のFD研修会への反映。	C	C	C	C	B

☆

2010年度以降に設定した「目標」	左記目標の「指標」	2009	2010	2011	2012	2013
	→					
	→					

《進捗状況(達成度)報告》 担当(記述)部局は「指標」に基づいた報告をしてください。

上記で自己評価した目標の進捗状況(達成度)について、次のとおり説明・報告する。

目標1	B	<p>Do: 目標を達成するために、目標を設定した年度以降、どのようなことを、誰が、どのようにして、どれだけ取り組んできたか 検証の仕組みを構築するまでには至っていないが、『3つのポリシーとシラバスについて』をテーマにしたFD研修会(2011年度秋学期に学部と合同実施)などを踏まえての継続的な議論とともに、カリキュラム・ポリシーおよびマップ、履修コース・分野別履修モデルが整備(2011～2012年度)されたことによる授業科目の位置付け明示が実現されている。2013年度以降のシラバスの作成においては、研究科-学部合併授業における学部学生と研究科学生の講義目的・到達目標、あるいは成績評価基準の差別化について、カリキュラム研究委員会(研究科)およびFD委員会(研究科)においてさらに検討し、適切なシラバス作成へ向けて授業担当者への徹底を図っている。</p> <p>Check: 結果はどうであったか。良かった点・効果が上がった点は何か。課題・改善点は何か 結果として授業目的・到達目標などについて改善が見られるなど、シラバスの詳細な記述の徹底につながっている。しかしながら、2013年度実施の認証評価において『…研究科では、成績評価方法などを課程ごとに明確に区別していないなかで、学部・大学院の合同授業が開講されていることは、学位課程の趣旨に照らして、改善が望まれる』(『関西学院大学に対する大学評価(認証評価)結果』, p.57)と指摘されるなど、いまだ大きな改善が求められている。</p> <p>Action: 今後どうするのか。伸長策、改善策は何か 上記認証評価の指摘については、2015年度カリキュラム改正を機に、研究科-学部合併授業の再設定を行う。カリキュラム全体として各授業科目の概要(あるべき到達目標を含む)を整備し、合併授業においてはその授業水準(大学院レベル)のなかで求められる学部生の水準を明確にし、評価基準を差別化する。</p> <p>その他</p>	☆
目標2	A	<p>Do: 目標を達成するために、目標を設定した年度以降、どのようなことを、誰が、どのようにして、どれだけ取り組んできたか 2012年度も継続して、FD研修会(研究科)を専任教員対象に年2回、非常勤教員対象に年1回開催している。学部と合同で開催することも多いが、それは『カリキュラム・ポリシー(CP)について』(2010年度)、『3つのポリシーとシラバスについて』(2011年度)のように研究科-学部間の差異を考慮しつつ検討を行う場合や、「修士論文・博士論文の審査基準」のように、すでにある程度議論がなされた問題から、新しい議論(「卒業論文審査基準」について、2013年度)を起こすことがあるためである。また研究科では、カリキュラム・ポリシー、シラバスなどに加え、学位取得に係るプロセスや基準が重要視され、それに対応した取り組みへの議論を適宜行っている。</p> <p>Check: 結果はどうであったか。良かった点・効果が上がった点は何か。課題・改善点は何か 研修会という場所を活用することにより、各教員間の意見交換も活発となり、全体的な調整のなかで事柄の周知徹底を図ることができている。</p> <p>Action: 今後どうするのか。伸長策、改善策は何か 2015年度カリキュラム改正に関しても、FD研修会(研究科)での意見が多分に反映されており、今後もカリキュラム・ポリシーの検証・再整備およびそれに沿った適切なシラバスの記述方法などについて、各教員の理解を確認しながら進めていく。</p> <p>その他</p>	☆
目標3	B	<p>Do: 目標を達成するために、目標を設定した年度以降、どのようなことを、誰が、どのようにして、どれだけ取り組んできたか 「学生による授業評価」の回収率(2012年度春学期16.0%、秋学期12.0%、2013年度春学期36.0%、秋学期12.0%)について、研究科副委員長を中心に向上の方策を検討し、学生へ協力を呼び掛けているが、向上は現段階で難しい。今後もカリキュラム研究委員会(研究科)やFD委員会(研究科)で継続的に議論していくが、院生会(院生による自治組織)からの「研究環境に関する要望書」(2011年6月、2012年6月、2013年6月、2014年6月)、「日本基督教団補教師検定試験に関する件」(2011年9月)を受けて、研究(・学修)環境の改善や進路支援(正課・課外教育を通じた伝道者へのプロセスの明示と授業運営)の整備のための研修会開催を検討している。</p> <p>Check: 結果はどうであったか。良かった点・効果が上がった点は何か。課題・改善点は何か 2013年度は「研究環境に関する要望書」で要請された「研究計画書」「研究報告書」「修士論文題目届」など各種提出書類のウェブサイトからの様式ダウンロードを可能とした。結果、「学位取得までのプロセス」に沿って、適切な時期に大きな負担なく書類作成に取り掛かることができている。実現できなかった要望についても、研究科からの「回答書」、またそれに応じての「院生会の見解」をやりとりしつつ、お互いにより関係性を醸成しながら、進めることができている。</p> <p>Action: 今後どうするのか。伸長策、改善策は何か 「学生による授業評価」の回収率をあげることに尽力するとともに、「院生会」との関係性を良好に保ちつつ、学生および研究科のよき理解のもとで学生の意見を制度にとり入れていく。</p> <p>その他</p>	☆
備考			☆